

中国語における言語変化の諸相と関連理論

高 謙

DOI: 10.18999/stul.34.167

1. はじめに

言語は時とともに変化するものである。無限に広がる現実世界は有限の言語形式によって表されることから、新しく生じた事象・現象・心象をより効率的に述べるためには、新しい語彙や文法的形式などが創造され用いられる必要がある。しかし、これらの新たな言語方式は無秩序に作られるのではなく、人間の認知や社会性にとって有機的に関連付けられている。これについて、Martinet (1962: 140) は「言語の経済性」(economy in language) といった概念を提示している。この「経済性」は言語行動や言語変化、言語構造を制約することを主張しており¹、言い換えれば、最も簡略的な(最小限の)言語形式によって最も効率的な(最大限の)情報を表現することが要求されると指摘している。例えば、現代中国語においては、動詞フレーズ“吃饭”[食事をする]が発生する場所を説明する場合、以下の例①と②の2つの表現方法がある。

①在食堂吃饭 [食堂で食事をする]	→	②吃食堂 [食堂で食事をする/食堂のご飯を食べる]
③在学校游泳 [学校で泳ぐ]	→	④ [?] 游学校
⑤在机场工作 [空港で働く]	→	⑥*工作机场

例①は前置詞フレーズによって行為の発生場所を表しているのに対し、例②は動目構造を通じて動作の場所を指し示す。例①のような前置詞文は自動詞、他動詞に拘らず用いら

1 つまり、人間は効率的に伝達しようという要求がある一方で、心と体の活動を最小限に止めさせる傾向がある(詳しくは、亀井(1996:475)を参照)。

れ、例③や例⑤のように生産性が高い構文である。また、例②のような多義性は読み取れず、前置詞“在”を用いて場所名詞“食堂”と連合し、動詞の前に置く必要がある。一方、例②は中国語の基本的語順 SVO に従い、場所名詞が目的語 O の位置に置かれ、ほかの文法的成分は介在しない。しかし、例②はその訳文が示すように多義であり、また、例④⑥のように転換することはできない。さらに、例②は口語表現として用いられる傾向がある。

以上の例①③⑤と例②を比較してみると、動作行為が及ぶ場所を示す際、前置詞文はより効率的であるのに対し、例②のような構造は簡略的な形式として用いられている。この簡略化と効率化は互いに矛盾しているように見られる傾向であるが、亀井(1996:475)は、この簡略化と効率化の間で均衡を求めつづけ、両者の「最適整合状態」を実現させるものを「言語の経済性」として指摘している。

上述のように、言語の経済性は言語変化を支配する原理である。経済性が働く際、この簡略化と効率化という傾向は、それぞれ言語変化の進行に現れる文法的縮小現象と拡張現象に反映されている。この縮小現象は音韻・形態面の縮約や文構成の拘束化などを指し、拡張現象とは新しい機能や範列的・統合的關係が生起され、文が表す意味が複合的かつ精緻になることを指す。このような縮小現象や拡張現象は言語変化のプロセスにおいて補い合いながら共存するものであるため、単方面の文法的縮小や拡張現象は存在しない。つまり、言語変化は両者が相互作用した結果である。

本研究は中国語における言語変化を取り上げ、その分析法と背景理論を概観するものである。第 2 節では、本研究の立脚点である「記号的文法観」(symbolic view of grammar)を導入した上で、言語変化の研究との関連性と必要性について述べる。第 3.1、3.2、3.3 節では、具体的なケースを考察するための方法や視点となる「語と構文の共起関係による検証」、「分類」、「語彙と文の相互作用」を取り上げ、これら 3 つの観点を通じて言語変化を考察する有効性と妥当性を論証する。そして第 3.4、3.5 節においては、言語の内部構成に注目する文法化理論と構文化理論に加え、発話場面に重点を置く「使用依拠モデル」を援用し、言語変化現象の諸相を考察していく。

2. 意味と形式の対応関係

2.1 意味と形式の結合

語彙項目だけではなく、構文を言語分析の一つの基本単位とみなすことができる。

Goldberg (2006) などは特定の語彙項目やフレーズ、単文に限らず、構文というものも意味と形式の結合体であると考えている。言語記号には恣意性が含まれる一方で、「意味と形式には一定の類像性が存在しており、意味が異なれば形式も異なる」というのは、いわゆる「記号的文法観」を指す。例として次の(1a) (1b)ではいずれも副詞“再”が動詞(句)“说”、“回去”の前に置かれ、未然のイベントを表している。

(1) a. 请您再₁说一遍。

[もう一度おっしゃってください]

b. 等雨停了您再₂回去吧。

[雨が止んだら、お帰りください]

このように両者の間には文法的類似点が存在するが、陆俭明(1993:128 - 129)や丸尾(1999:199 - 213)は両者の相違点について、例(1a)の“再₁”は「同一行為の重複」を表すのに対して、例(1b)の“再₂”は「行為の生起順序」「違う動作の連続」を表現すると指摘している。“再₂”の後ろの動作“回去”は主語が本来行おうとする行為であるが、その前のイベント“雨停了”が実現された後に実行・続行する意味を表す。この「動作の「追加」」は“再₁”と“再₂”に共通する意味素性である。異なる意味に動機づけられ、副詞“再₂”が用いられる場合、文において「追加」する動作“回去”と「追加」する前の事象“雨停了”の2つを明示しなければならない。それに対して、重複を表す“再₁”が含まれた例(1a)では、「追加」する動作と「追加」する前の動作は同一行為であるため、同一動作を示してもかまわないが、重複の回数を表す動量詞“一遍”を用いるのが一般的である。また、それぞれ発話者が際立たせようとする部分が異なるため、実際の使用場面においては、例(1a)は“再₁”あるいはその後ろの成分にストレスが置かれるのに対し、例(1b)では“再₂”の前にある成分に置かれる。この比較が示すように、副詞“再”の意味と形式の間には対応関係があると言える。

これによって、異なる意味は異なる形式で示されることが分かる。言語変化を検討する際には、この両側面の相互関係に注目する必要がある、意味と形式は互いに論拠として論じなければならない。

2.2 「構文」も意味と形式の結合体である

多くの先行研究においては、構文は一般的な統語原理の適用の結果であり、その意味は各語彙項目の意味の総和であると理解されている。例えば、次の例(2a) (2b)には、二価動詞“吃”、“盖”が用いられているが、これらの動詞が要求する名詞“十个孩子”、“五个人”

と“一条凳子”、“一条被子”はそれぞれ動作主と動作対象である。例(2a)(2b)はともに具体的な動作行為を表し、文全体の意味は動詞やその他の成分から推測することができる。現実の事態を表す文であるため、主語は定名詞が用いられる必要があり、例(2c)(2d)のように“那”、“美国青年”といった限定成分や修飾成分を付加することができる。

(2) a. 十个孩子坐了一条凳子。

[十人の子供は一脚の腰掛けに座っていた]

b. 五个人盖了一条被子。

[五人は一枚の布団をかぶっていた]

c. 那十个孩子坐了一条凳子。

[その十人の子供は一脚の腰掛けに座っていた]

d. 五个美国青年人盖了一条被子。

[五人のアメリカ人青年は一枚の布団をかぶっていた]

一方で、この主語と目的語にある名詞項目を互いに置換したケース(例(3a)(3b))も存在する。

(3) a. 一条凳子坐了十个孩子。

[一脚の椅子を十人の子供で座っている]

b. 一条被子盖了五个人。

[一枚の布団を五人でかぶっている]

c.*一条凳子坐了那十个孩子。

d.*一条被子盖了五个美国青年人。

同じ語彙項目によって構成されているにもかかわらず、例(3a)(3b)は例(2a)(2b)のように、主語の“一条凳子”、“一条被子”や目的語の“十个孩子”、“五个人”が典型的な動作主や動作対象とは見なされない。例(3a)(3b)は例(2a)(2b)と同様、SVO構造が用いられているが、主語の“一条凳子”、“一条被子”は“坐”、“盖”の方式によって“十个孩子”、“五个人”を収容することを表している。つまり、「収容義」を中心として、文構成は「収容するもの+収容する方式+収容されるもの」となっている。任鷹(1999:1)は例(3a)(3b)のような文を“供用句”と呼んでおり、収容されるものの量こそが文の焦点であると指摘している。“供用句”では、主語と目的語の前に必ず数量フレーズが置かれ、具体的なイベントや事態を表さなため、例(3c)(3d)のように定成分“那”や“美国青年”を伴うことはできない。“供用句”のような言語現象に関して、Goldberg(2006)が指摘するのように、構文にはそれ自体に意

味と形式があり、一つの言語単位と見なすことができるのである。

2.3 言語は可変的なものである

語彙項目であれ構文であれ、あらゆる自然言語の発話は、特定のコンテキストの中で機能し、理解される。佐藤(1986:33 - 60)では、意味というものは確固たるものではなく、流動的でもなく、形式に束縛されながら、ある範囲内において伸縮して存在していると述べられている。そのため、言語の意味と形式の結びつきは必ずしも安定的なものではなく、言語内・言語外の諸要素によって変化し続けている。

例えば、以下の例(4a)では動詞“走”と“跑”が対比的に用いられているが、ともに「両足を動かして移動する」という意味を表す。それに対して、例(4b)のように子供から引き止められるという文脈を付加すると、動詞“走”からは「(その場から)離れる」という意味が読み取れる。例(4)の両義を比べると、省かれた意味素性[自力で両足歩行する]もあり、拡張された意味特徴[話し手の元から離れる]も見られる。

(4) a. 你別走，得跑着才能追上他呀。

[歩いてちゃだめだよ、彼に追いつくためには走らなきゃ]

b. 妈妈，你别走，留下来陪我。

[ママ、行かないで、そばにいて]

語彙のみならず、次に挙げる3つの構文にも意味の変化を見ることができる。例(5a)は典型的な二重目的語構文であり、一般的に三価動詞が用いられ、授与・取得といった「移動義」を表す。ここでは所有関係の移動を含意し、移動するものである間接的目的語は“三块钱”のように具体的な名詞句で現れる場合が多い。

(5) a. 小王给了小红三块钱。

[王さんは紅さんに三元を与えた]

b. 小王吃了小红三个苹果。

[王さんは紅さんのリンゴを三つ食べてしまった]

c. 小王扇了小红一巴掌。

[王さんは紅さんに一回ビンタした]

加納(2016:99 - 117)は例(5b) (5c)のような非典型的な二重目的語構文を取り上げ、それらの意味特徴について論じている。例(5a)と例(5b) (5c)は文構成が類似しているものの、

例(5c)の間接的目的語“巴掌”は臨時借用量詞²としてが用いられており、例(5b)(5c)の動詞“吃”、“扇”はいずれも二価動詞である。二価動詞は一般的に対象に影響を与える動作行為や事象を含意することから、文全体は授与や取得を表さず、主に「消失義」や「加害義」を表すことから、加納(2016:115)は例(5b)(5c)を例(5a)から拡張した表現であるとしている。要するに、言語の意味と形式は一定の文脈や複合的な表現を付加しながら変化する可能性がある。ここから、語彙だけではなく構文も拡張し得るものであることが分かる。

3. 言語変化に関する分析法と理論

3.1 語と構文の共起関係による検証

上述のように、言語の特定の意味を表すには、それと対応する特定の形式がある。例えば、グリースン(1970:183)によれば、屈折語であるラテン語で「パウロはマリアを見かけた」という意味を表す場合、次の例(6)のように6つの方式が存在している。語彙 Paulus は Paul の主格(パウロは)を表し、Mariam は Mary の対格(マリアを)を表現し、動詞 vidit は動作 videō[見かける]の完了形である。文の格関係や人称、時制、相、数、性、法、態などともに名詞及び動詞の接辞を通じて標示されるため、語順は相対的に自由である。

(6) a.Paulus vidit Mariam.

b.Mariam vidit Paulus.

c.Paulus Mariam vidit.

d.Mariam vidit Paulus.

e.Vidit Paulus Mariam.

f.Vidit Mariam Paulus.

(例(6)a~fはグリースン(1970:183)より引用)

それに対して、孤立語である中国語には、形態変化や格助詞が存在しないため、文の語順を変更することができない。SVOの語順で表される中国語は、主語と目的語は動詞を参照点として、その前後にそれぞれ置かれる。そのため、文の格関係は語彙の固定的な文法的位置によって読み取ることができ、形態変化や格助詞に頼る必要がない。朱德熙(1985:2)は“因为汉语缺乏形态,所以词序和虚词显得特别重要”「中国語は形態変化が乏しいので、語順と機能語の作用が特に重要である」と述べている。裏を返せば、中国語は語順と機能語に頼る度合いが高いため、形態変化という表現手段は必要ないとも考えられる。

2 ここでは量詞として借用された身体部位名詞を指す。

中国語では、語と語の位置関係は内部構成や相互作用、主従関係を示しており、語順と語彙の分布そのものも文法的機能を実現する主な手段である。つまり、それらは意味と形式の対応関係を反映しつつ、言語記述の実証的方法として用いられている。

例えば、中国語では「たちまち、だしぬけに、突然」といった意味を表す語は、例(7a)のような“忽然”、“突然”の2つがある。両者の機能は類似し、同時に連用修飾語として用いられ、互いに置き換えられるケースが多い。単に意味の角度から両者を区別するのは難しいが、例(7)b~dのように、ほかの統合的關係を加えてみると、その相違点は明らかである。すなわち、“突然”は形容詞として連体修飾語や述語、補語として使えるのに対し、“忽然”は副詞用法に限定されることが分かる。

(7) a. 天忽然/突然下起雨来了。

[にわかに雨が降ってきた]

b. 我有一个突然的消息要告诉你。 (*忽然)

[君に知らせなくてはならない急な知らせがある]

c. 这个消息突然极了。 (*忽然)

[これは寝耳に水だ]

d. 这个消息来得突然, 我还没有做好准备。 (*忽然)

[この情報が突如飛び込んで来たが、まだ準備できていない]

これ以外にも、統合的關係や文構成を転換することによって、構文を区別することもできる。例えば、以下の例(8)a~dは、いずれも「場所名詞+動詞+“着”+名詞」の構造が用いられており、存在のあり方を表していることから、「存現文」の一種と考えられる。しかし、形式が類似していても、文の意味は同一とは限らない(陆俭明 2003 :88 - 89)。例(8a) (8b)において用いられる動詞“坐”、“放”は「付着義」の意味素性をもち、“着”と組み合わせて静止や動作の後に残された物の状態を含意する。そのため、例(8a) (8b)は例(8a') (8b')のように、動作の付着する場所を指し示す“V 在”構文に転換することができる。いわゆる“静态存在句”(宋玉柱 1982 : 10)である。

(8) a. 台上坐着主席团。 ———→ a'. 主席团坐在台上。

[壇上には主席団が座っている] [主席団は壇上に座っている]

b. 桌上放着玫瑰花。 ———→ b'. 玫瑰花放在桌上。

[テーブルの上にバラが置いてある] [バラはテーブルの上に置いてある]

一方、次の例(8c) (8d)のような[-付着義]の動詞“下”、“上”は“着”と連合して動作の持

続・進行を表す。例(8c) (8d)は動作の着点を表さないため、例(8a') (8b')のように“V 在”構文に転換できず、例(8c') (8d')のように副詞“正在”と共起し得る。例(8c) (8d)のような構文は動作行為を中心としていることから、宋玉柱(1982:10)ではこの種の構文を“动态存在句”と呼んでいる。

- | | | |
|------------------------|---|----------------------|
| (8) c.外面 <u>下着</u> 大雨。 | → | c'.外面 <u>正在</u> 下大雨。 |
| [外は大雨が降っている] | | [外は大雨が降っている] |
| d.教室里 <u>上着</u> 课。 | → | d'.教室里 <u>正在</u> 上课。 |
| [教室には授業が行われている] | | [教室には授業が行われている] |

そして、すべての言語形式は発話状況において、いずれも一定のコンテキストが付加されて用いられる。ブレイクモア(1996)は、コンテキストも一種の言語形式と見なされ、文の機能を区別する手段の一つであると指摘している。中国語では、文の命題が真か偽かを問う疑問文には、主に例(9a)の諾否疑問文と例(9b)の反復疑問文の2つがある。諾否疑問文は「肯定文+文末助詞“吗”」の形式で表現されるのに対し、反復疑問文は文末助詞を付ける必要がなく、述語や助動詞を「肯定+否定」の順で並べる必要がある。2つの文の機能は類似している。

- (9) a.现在外面下雨吗?
[今外は雨が降っていますか?]
- b.现在外面不下雨?
[今外は雨が降っていますか?]

しかし、次の例(10)のように、特定のコンテキストを付加すると、反復疑問文は用いることができなくなる。つまり、ある具体的なモノゴトを参照した上で、話し手が自ら現状を推測してから相手に確認する際には、諾否疑問文を選択しなければならない。諾否疑問文を使う場合、話し手の確信度は反復疑問文より高い。

- (10)a.哎呀，怎么湿成这样了？现在外面下雨吗?
[おい、なんでそんなにびしょ濡れなんだ？今外は雨が降っていますか?]
- b.*哎呀，怎么湿成这样了？现在外面不下雨?

言語活動は発話環境の中で行われるものである。言語変化は変化した項目のみならず、その共起成分や発話状況も共に変化する過程をカバーするのである。このように意味と形式だけではなく、文脈も言語の性質や特徴を検証する重要な手段である。

3.2 分類について

言語変化とは、本質的に文法項目におけるある側面の増減であり、つまり、文法項目が段階 A (起点) から段階 B (終点) へ転換するプロセスを指す (Traugott・Trousdale 2013 : 94 - 108)。客観的に言えば、言語変化は段階的・連続的なものであるため、明確な線を引くことは難しい。しかし、言語変化を論じるには、起点領域 (source domain) と目標領域 (target domain) を挙げて比較し、それらの間の相違点や類似点を抽出した上で、両者が変化するルートを明確に示さなければならない。そのため、段階 A と段階 B を確立することが大前提であり、研究対象を一定の分類にしたがって分析するという手法が不可欠である。その分類は人為的あるいは技巧的であってはならないことから、守田 (2013) では意味的分類を支える条件について以下の 2 点を指摘している。

- i) カテゴリーのメンバーの間に確かな類似性があり、分類自体をほかの研究者と共有できること。これは人為分類と自然分類の最も顕著な特徴である。
- ii) ほかの分類と比べて、当該の分類によって現象がより良く説明され、他の現象に対しても一定の説明力を有すること。

(守田 2013:29 - 53)

例えば、中国語の動詞分類については、これまで先行研究が多く見られる。马庆株 (1988 : 157 - 180) は中国語の動詞を意志動詞と非意志動詞に大別しており、「意志動詞は“来/去+V+ (O) +来/去”という連動構造に用いられ、非意志動詞は適用できない」という判断基準を挙げている。次の例 (11) では、意志動詞“看”[見る]と非意志動詞“看见”[見かける]、“病”[病気になる]を例として説明する。

(11)a. 去看电影去。 (马庆株 1988 :160)

[映画を見に行く]

b.*来看见来。

c.*去病去。

意志動詞“看”は主体が動作を自分の意志でコントロールできる動詞であるのに対し、非意志動詞“看见”、“病”は主体が自分の意志でコントロールできない状態や変化、結果、属性を指す場合が多い。しかし、意志動詞と非意志動詞の対立は意味素性や語彙レベルに留まらず、ほかの文成分との共起関係や文法レベルにも見られる。例えば、次の例 (12) からは、意志動詞、非意志動詞の別が語気助詞との共起や禁止表現、副詞との連用や、重ね型に用いられる際にも反映されることが分かる。

- | | | | |
|------------|-------|--------|----------|
| (12)a. 看吧。 | 甬看。 | 赶紧看。 | 看看。 |
| [見て] | [見るな] | [早く見て] | [ちょっと見る] |
| b.*看见吧。 | *甬看见。 | *赶紧看见。 | *看见看见。 |
| c.*病吧。 | *甬病。 | *赶紧病。 | *病病。 |

つまり、非意志動詞“看见”、“病”は「主体にコントロールされない」といった意味素性があるため、命令形や禁止表現で用いることができず、語気を和らげる機能や動作の少量を表す動詞の重ね型にも用いにくい。马庆株(1988)の分類は語彙の意味特徴の相違が文の形式に与える影響を明確に示したため、林华勇(2005:34-40)や王红斌(2009)のような後続研究は「意志-非意志」といった対立を一つの意味範疇として論じている。

このように、分類を行う際には、まず客観的な根拠と基準に基づき、各種類の相違点を明確に示さなければならない。そして、ある分類を主張した上で、これを元として吟味する課題を明らかにし、この分類を選択する有効性を提示する必要がある。

3.3 語彙と文の相互作用

語彙と文は互いに独立したものではなく、連続体であると考えられる。語彙は文の構成要素として、文のあらゆる文法的特徴を決定することはできないものの、文中のある語彙が変わることによって、文全体の意味も変わる。例えば、丸尾(2005)は中国語の形式「在+名詞+動詞」と「動詞+在+名詞」の異同点と互換性について論じている。次の例(13)はフレーズ“在上海”が動詞“住”に前置ないしは後置されるという形式的な相違点があり、両者は置換可能である。

- (13) 他住在上海。 ⇔ 他在上海住。
 [彼は上海に住んでいる] [彼は上海で住んでいる]

次の例(14a)のフレーズ“在上海”は動詞“住”のすぐ後ろに置かれており、両者の結びつきは強い。つまり、“V 在”は一つの動補構造であり、“住”が実現された後の着点を指し示す表現形式であることから、間にほかの文成分を挿入することができない。一方で、例(14b)(14c)のようにその後ろに助詞“了”を入れられる。また、「動詞+在+名詞」構造は動作終了後の到達・存在に重点を置いているため、その動詞には通常[+方向性][+接触義]の意味素性が内包されていると丸尾(2005:85, 98-99)は指摘している。

- (14)a. 他住在上海。
 b. 他住在了上海。

[彼は上海に住み始めた/住んでいた]

c. 结婚日期定在了八月。

[結婚の時期は八月に決まった]

これに対し、次の例(15a)はフレーズ“在上海”が動詞“住”の前に現れている。“在”は“住”から距離が遠く、両者の結びつきは弱いいため、例(15b)のように両者の間にほかの文成分が入ることも可能である。丸尾(2005:91)は“在”及びフレーズ“在上海”は“住”にとっては外在的な付加語(adjunct)であると述べている。つまり、例(15b)(15c)における前置詞フレーズ“在上海”、“在孩子上大学前”は、連用修飾語として“住”の発生する場所・時間を補充するものである。ある場所・時間で動作が行われることを表現し、丸尾(2005:90)は「在+名詞+動詞」構造があらゆる動作動詞と共起し得ることを示し、“V 在”構造と異なり、[+方向性][+接触義]の意味素性がある動詞を用いる前提はない。

(15)a. 他在上海住。

b. 他在上海偷偷地一个人住了一个月。

[彼は上海でこっそりと一人で一ヶ月間住んでいた]

c. 他在孩子上大学前一直住这里。

[彼は子供が大学に上がる前、ずっとここに住んでいた]

要するに、例(14a)(15a)は同じ文成分で構成されているものの、“在上海”がそれぞれ異なる文法的位置に挿入されることにより、異なる共起関係と意味が生じている。

全体は必ずしも部分の総和ではない。同時に、部分の全ても全体から規定されるわけではない。例えば、中国語の副詞は主に連用修飾語として用いられ、動詞や形容詞を修飾するのが通常である。例えば、以下の例(16a)のように「程度副詞+性質形容詞」の形式は、生産性が高く、固定的な形式として見なすことができる。しかし、次の例(16b)のように「程度副詞+名詞」の形式を以て性質の程度を表す用例も散見され、この点において例(16b)は例(16a)の「程度副詞+性質形容詞」の機能と類似している。

- (16)a. 很冷 挺热 最高 太难
 [とても寒い] [随分暑い] [最も高い] [甚だ難しい]
- b. 很男人 挺淑女 最阳光
 [とても男らしい] [随分淑やかだ] [最も朗らかだ]
- c. *很桌子 *挺打印机 *最书

このような表現として成立するのは主に特性が目立つ名詞であり、例(16c)のように“桌子”、

“打印机”、“书”の場合は不自然になる。また、例(16b)において、“男人”、“淑女”、“阳光”はいずれも名詞としての事物そのものを指示する機能はなくなり、指示する事物のある側面、即ち状態や属性、性質を描写することから、形容詞に近いと言える。しかし、例(16b)の“男人”、“淑女”、“阳光”は単独としては形容詞の機能³をもっておらず、重ね型にすることもできないことから、名詞と形容詞の兼類とは考えられない。施春宏(2001:212-224)は例(16b)の用法が「程度副詞+X(名詞)」という表現で用いられる前提があり、臨時的な用法に限られていると指摘している。つまり、上記の用法は「程度副詞+X」という固定表現に動機づけられ成立するものであり、名詞が本来もつ文法的特徴は臨時的に変化している。名詞は一般的に程度副詞の修飾を受けることはできないが、例(16b)のように意味的不整合を回避するための意味解釈を生成しているのである。Pustejovsky(1996:3)はこのようなメカニズムを「強制効果(coercion effect)」と呼んでいる。上述のように、表現全体が語彙項目に影響を与え、この語彙を固定表現と関連・合致させることができるのである。

3.4 文法化と構文化

文法化は言語変化に注目する分野であり、内容語が機能語に変わる過程と原因を専ら追究する。言い換えれば、文法化研究は変化する語彙項目を中心に、それが開いた語彙のクラスから閉じた文法的要素のクラスへ転換することを取り扱うジャンルである。

例えば、蔣紹愚(1994:192-200)は助詞“得”の文法化現象について論じており、それが動詞の用法をもととして連動構造“V 得”に用いられ、後に“V 得 C”形式の出現によって構造助詞に変遷したルートを明確に示している。本節では“得”が文法化する過程と原因に関する記述は省き、以下の例(17)(18)における“得”の文法的特徴を比較してみる。例(17)と例(18)の“得”はそれぞれ動詞と助詞であり、“得”の文法化においては、起点領域と目標領域に対応している。“得”は例(17a)では二価動詞として用いられており、“de”と発音され、通常2つの項を伴う。述語であるため、前に副詞“竟然”が置かれたり、動量を表す補語“一次”やアスペクト助詞“了”をその後ろに付加したりすることが可能である。[獲得]という実質的な意味をもち、述語以外にも、例(17b)のように主語として使われ、その文法的位置は相対的にみて自由であると言える。

3 形容詞が持つ機能としては、“长”を例とすれば、程度副詞の修飾を受ける“非常长”や上記の重ね型“长长的”以外にも、補語として用いられるケース“拉长了”や程度を尋ねる疑問表現“多长”などを構成することができることなどが挙げられる。

(17)a.他竟然得了一次第一名。

[こともあろうに彼は一回で一位を取った]

b.得不得第一名已经不重要了。

[一位を取れるか否かはもう肝心なことではない]

それに対して、次の例(18)のように助詞として使用される場合、“得”は軽声で“de”と発音される。例(17)のような述語としての特徴がなくなり、実質的な意味を表さず、前後に項を伴わない。“得”は文の基幹構造ではなく、主に動詞“说”、“进步”とその後ろの補語“出来”、“很快”を連結する機能を果たし、動詞と補語の間に挿入されるという固定的な文法的位置を有している。

(18)a.你说得出来他的名字吗?

[彼の名前を言えますか?]

b.他进步得很快。

[彼は進歩が速い]

例(17)(18)のような動詞と助詞用法の比較や、その文法化傾向は“得”に関する現象に限らず、文法化現象に見られる普遍的なものである。Heine・Reh(1984:16)は文法化のプロセスは音韻・形式・意味面の変化が密接に関連した複合的な言語現象であると、以下の3点にまとめている。

- ①音声的プロセス(phonetic processes)
- ②形態・統語的プロセス(morphosyntactic processes)
- ③機能的プロセス(functional processes)

まず、音声的な側面においては、文法化された語彙項目は上記の“得”のように、単語の発音上の縮小傾向が観察される。そして、形態・統語的な側面では、単語の自立性や語形変化が失われ、他の要素に従属、かつ依存する度合いが高くなる。また、文の基幹構造(名詞や動詞)から修飾語へ一方向的に変化し、内容語としての文法的特徴がなくなり、標示する位置が固定的かつ義務的になる傾向がみられる。加えて、機能的な側面で言えば、本来の実質的な意味が漂白(bleaching)されると同時に、より抽象的な文法的機能を表すようになる。Heine・Claudi・Hünemeyer(1991:233)は文法化の過程を言語的実体の喪失として特徴づけ、いわゆる loss in linguistic substance(縮小的な文法化観(筆者訳))としている。

しかし、抽象的な文法機能が一定の語彙や構造に特化される一方で、逆にこの語彙や構造が機能の変化に応じて拡大・変容する側面も存在する。例えば、中国語の“把”は上述

の“得”と同様に、文法化のプロセスを辿っている語である。次の例(19)(20)はそれぞれ“把”の動詞用法と前置詞用法であるが、例(19)のように動詞として用いられる際、“把”は手を用いた動作を表すため、その動作主は有情物に限定されている。

(19) 他把着栏杆，忧郁地望着窗外。

[彼は手すりを握り、憂鬱そうに窓から外を眺めていた]

(20)a. 洪水把大楼冲垮了。

[洪水はビルを押し流して壊した]

b. 差点把你给忘了。 (『中日大辞典・第三版』:28)

[君のことを忘れるところだった]

c. 这几天可把我忙坏了。 (『中日大辞典・第三版』:29)

[この数日はまったく忙しかった]

それに対して、例(20)における前置詞“把”は実質的な意味が失われたことでその意味的束縛もなくなるため、文の主語と目的語は“洪水”や“大楼”のような無情物や一般名詞も使用可能となる。“把”は文法的位置が固定化され、“N₁+把+N₂+VP/AP”形式で用いられる一方で、その弁別性(distinction)は高くなり、それと共起できる文成分は却って増加する。このように、“N₁+把+N₂+VP/AP”は一つ構文として見なされるのである。SVO 文とは異なり、“把”構文の目的語“大楼”、“你”、“我”は“把”に導かれ、述語(通常、動結構造が用いられる)の前に置かれるとともに、例(20a)(20b)のような構文には「処置義」という新しい意味が生じる。また、例(20c)のように「何らかの原因で、発話者の意に沿わないことになった」という語用的意味が生じるケースもある。“把”構文の成立には、[+受影性]や[+既然性]といった意味素性が要求されるため、後続する述語成分“冲垮”、“忘了”、“忙坏”と共起することになり、動補構造などの複合的形式が用いられる。

要するに、文法化現象においては、変化する語彙項目が指示性や具象性、文法的自由を失うという縮小的な側面がみられると同時に、語彙項目をめぐる範列的、統合的な拡張が観察され、発話場面の適用範囲が拡大されるという方面もみられる。前者は主に形式的な変化についての記述(形式的な簡略化)であり、後者は意味と機能を中心とするもの(意味的な効率化)である。両者は文法化の進行に従って共存し得るものであり、文法化現象を考察するための重要な根拠である。

以上のように、単一の語彙項目における意味や文法的機能の共時的・通時的変化を考察する文法化理論に対して、Goldberg (2006) や Traugott・Trousdale (2013) は、変化し

た語とともに現れる文成分や統語環境、発話状況全体の変化を検討する「構文理論」を提示している。

例えば、中国語学においては、“王冕死了父亲”[王冕は父親に死なれた]という文が生成される動機付けは興味深い課題とされており、これについて多くの検討がなされてきた。動詞“死”は通常一価動詞であると考えられるが、上記のように2つの項を伴う文が存在し得る根拠について議論されており、中でも、帥志嵩(2008)は通時的な資料に基づき、“死”の他動的用法は“喪”に由来するものであると主張している。帥志嵩(2008:259 - 269)によれば、古代漢語において、動詞“喪”は[なくす、喪失する]という意味のほか、[滅びる、死ぬ]という用法も存在し、他動詞と自動詞に兼用されていた。後者は動詞“死”、“亡”と類似しているが、“死”の使用範囲と頻率は高く、近現代に至り、“死”は“喪”の代替語となり、その過程で“喪”の他動的な用法も継承したと帥志嵩(2008)は論じている。このような分析は、いわゆる語彙項目“死”と“喪”の変化に注目する文法的な手法と考えられる。

“王冕死了父亲”の主語“王冕”と目的語“父亲”の間には領属関係が存在する。つまり、文全体から、「父親が死ぬ」ことにより、“王冕”が被害を被ったという結果に至ったという構文義が読み取れる。沈家煊(2006:291 - 300) (2009:15 - 22)は構文理論を援用し、以下のような類推関係を示している。

- | | |
|-----------------|---------------------------|
| (21)a. 王冕的某物丢了。 | b. 王冕丢了某物。 (沈家煊 2006:296) |
| [王冕のあるものがなくなった] | [王冕はあるものをなくした] |
| x. 王冕的父亲死了。 | y. — ←xb. 王冕死了父亲。 |
| [王冕の父親はなくなった] | [王冕は父親に死なれた] |

すなわち、動詞“丢”は上記のような自動的・他動的な用法を兼ねているため、例(21a) (21b)は互いに置換することができ、一定の対応関係が存在している。動詞“死”の他動的用法はこの対応関係から類推されたものであると同時に、[主語にとっての喪失]という構文義は例(21b)から受け継いだものであると沈家煊(2006:291 - 300) (2009:15 - 22)は論じている。また、このような解釈は“王冕死了父亲”といった文だけではなく、同じく「喪失義」を表す例(22a)や「獲得義」を表す例(22b)が生成される原因にも当てはまると指摘している。

- | | |
|---------------------|---------------|
| (22)a. 他们队走了一个人。 | (沈家煊 2009:18) |
| [彼らのチームはメンバーが一人減った] | |
| b. 他们队来了一个人。 | |
| [彼らのチームはメンバーが一人増えた] | |

3.5 使用依拠モデル

語彙の性質は文の中で規定され、語彙の意味はどの構文内に現れても一定である。言い換えれば、語彙の意味は構造や文脈、発話環境によって実現されている。例えば、以下の例(23)の二価動詞“吃”は[食べる]や[頼る]、[消滅させる]、[受ける]、[理解する]などの多義性をもっているが、これらの特定の意味はそれぞれ特定の項構造やコンテキストから生じる。現代中国語では、“吃”の基本義は[食べる]であるが、これは「ものを口の中に入れて、咀嚼してから呑み込み、吸収する」という行為を表している。“吃”と類似する動詞に“尝”[味をみる]があるが、“吃”は“尝”より意味特徴が複雑であり、内包している意味素性も多様である。

- | | | |
|-----------|--------------|-----------|
| (23)a.吃西瓜 | b.吃父母 | c.吃掉敌人 |
| [スイカを食べる] | [脛を齧る] | [敵を消滅させる] |
| d.吃败仗 | e.吃透知识 | |
| [敗北を喫する] | [知識を完全に理解する] | |

このように“吃”はさまざまな意味的側面をもっているが、例(23) a-e が示すように、異なるコンテキストや共起成分は異なる意味素性を際立たせると同時に、動詞の意味も変化させる。このように、意味には「柔軟性」があり、言語の使用場面やコンテキストは語彙の意味変化を引き起こす直接的な原因となっている。それに対して、意味素性が単一的な“尝”は、例(23) b-e のような拡張的意味は適用されない。

そして、コンテキストは動詞以外にもその項構造にも影響を与える。例えば、次の例(24) a-c はいずれも「信号を待つ」という意味に読み取れる。目的語の位置に置かれている名詞性成分“红绿灯”[信号]、“红灯”[赤信号]、“绿灯”[青信号]はそれぞれ異なるものの、いずれも「信号を待つ」に関連する要素である。同じ事象を指しながら、“等”の後ろに据えられるのは動作対象“红绿灯”のみならず、動作を行う原因(“红灯”)や目的(“绿灯”)も用いられ、その目的語の使用範疇はコンテキストによって拡大されている。中国語では文法成分と品詞との間に一対一の対応関係が存在しないと同様に、項の性質とその文法的位置の対応も一つのパターンに限らず、コンテキストによって調整されるケースが多く見られる。

- (24)a.车速可由每小时 15 公里左右提高到 40 公里以上，不等红绿灯，基本上可以不停车。

(CCL:《1994 年报刊精选》)

[車の時速は 15 キロから 40 キロ以上に上げられ、信号を待つ場合を除いて、基本的に停車する必要はない]

b.人如果没什么事干,等红灯都是一种享受。(CCL:《1997年作家文摘》)

[人は暇な時は、赤信号で待つことですら楽しみである]

c.即使当时街上空无一人,也得等绿灯。

(CCL:《刘再复、李泽厚对话:个人主义在中国的沉浮》)

[たとえ周りに誰もいなくても、青信号を待たなければならない]

上で言及した「意味の調整」のように、字義的な意味に具体的なコンテキストが介入することで、語彙や文の意味素性は増減あるいは転換する可能性があり、臨時的・共時的な意味が生じ得る。これらが繰り返されることで、高い使用頻率やイディオム化が起こり、その臨時的意味は字義の意味として定着する可能性が出てくる。これがいわゆる使用依拠モデル (usage-based model) であり、コンテキストは言語変化を引き起こす肝心な要素と言えよう。

4. おわりに

本稿では、記号的文法観に基づき、現代中国語における言語変化の各側面と特徴について考察した。まず、言語は意味と形式の結合体であり、この両者を互いに論拠として言語研究を行わなければならないことを確認し、次に、変化し得る言語項目は語彙に限らず、構文も変わりつつあることを実例を以て論証した。また、言語変化を検討する際には、「語と構文の共起関係による検証」と「分類」、「語彙と構文の相互作用」という3つの点が必須であることを提示した。最後に、文法化と構文化理論を挙げ、その間に見られる継承性を示した上で、発話環境及び文脈も言語変化を誘導する重要な要素であると指摘した。

[参考文献]

加納希美 2016. 「拡張二重目的語構文の成立条件—臨時量詞による結果描写との関連を中心に」、『中国語学』263: 99 - 117 頁.

亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 1996. 『言語学大辞典』(第6巻 術語編). 三省堂.

グリースン, H.A. 1970. 『記述言語学』竹林滋・横山一郎訳、大修館書店.

小柳智一 2018. 『文法的変化の研究』、くろしお出版社.

佐藤信夫 1986. 『意味の弾性—レトリックの意味論へ』、岩波書店.

ブレイクモア, D. 1996. 『ひとは発話をどう理解するか—関連性理論入門』武内道子・

山崎英一訳、ひつじ書房.

守田貴弘 2013. 「意味的分類の科学的妥当性」、『言語研究』144 : 29 - 53 頁.

丸尾誠 1999. 「“还”の連続性・“再”の非連続性」、『言語文化論集』20 : 199 - 213 頁.

丸尾誠 2005. 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』、白帝社.

蒋绍愚 1994. 《近代汉语研究概况》、北京大学出版社.

林华勇 2005. 〈可控副词和非可控副词〉、《语言研究》第 1 期 : 34 - 40 页.

陆俭明 1993. 《现代汉语句法论》、商务印书馆.

陆俭明 2003. 《现代汉语语法研究教程》、北京大学出版社.

马庆株 1988. 〈自主动词和非自主动词〉、《中国语言学报》第 3 期 : 157 - 180 页.

任鹰 1999. 〈主宾可换位供用句的语义条件分析〉、《汉语学习》第 3 期 : 1 - 6 页.

沈家煊 2006. 〈“王冕死了父亲”的生成方式—兼说汉语“糅合”造句〉、《中国语文》第 4 期 : 291 - 300 页.

沈家煊 2009. 〈“计量得失”和“计较得失”—再论“王冕死了父亲”的句式意义和生成方式〉、《语言教学与研究》第 5 期 : 15 - 21 页.

施春宏 2001. 〈名词的描述性语义特征与副词组合的可能性〉、《中国语文》第 3 期 : 212 - 224 页.

帅志嵩 2008. 〈“王冕死了父亲”的衍生过程和机制〉、《语言科学》第 3 期 : 259 - 269 页.

宋玉柱 1982. 〈动态存在句〉、《汉语学习》第 6 期 : 9 - 15 页.

王红斌 2009. 《现代汉语的事件句和非事件句》、光明日报出版社.

朱德熙 1985. 《语法答问》、商务印书馆.

Goldberg, A.E. 2006. *Construction at Work : The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press.

Heine, Bernd · Reh, Mechthild. 1984. *Grammaticalization and Reanalysis in African Languages*. Helmut Buske Verlag Hamburg.

Heine, Bernd · Claudi, Ulrike · Hünnemeyer, Friederike . 1991. *Grammaticalization: A conceptual framework* . University of Chicago Press.

Martinet, Andre. 1962. *A Functional View of Language*. Clarendon Press.

Pustejovsky, James. 1996. *The generative lexicon*. MIT Press.

Traugott, E.C. ・ Trousdale, G. 2013. *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press.

[例文出典]

CCL (Center for Chinese Linguistics PKU) : 北京大学漢語言語学研究センターコーパス.